

44.「子どもを叱る（怒る）」

2012年7月1日 社会福祉法人 江刺保育園

子どもを叱りつける時、どうして子どもを叱りつけているのか分からなくなる時があると思います。何か嫌なことがあった時、子どもを叱ることで嫌な気持ちを埋め合わせてしまうこともあります。感情的になってしまいそれを押さえることができなくなる時もあります。これらはだれでも親として体験することです。子どもを冷静に叱ることは難しいことです。叱るというよりは自分の怒りを子どもにぶつけてしまうことの方が多いかもかもしれません。子どもを叱りつけた後の自分を顧みたと、自分自身を嫌な人間だと後悔するときもあります。どうしてこんなことをしてしまうのか混乱し、落ち込んでしまうこともあります。そんなことがあると親として自分は親失格だと落ち込んでしまうこともあると思います。しかし、人間はそうなのです。自分の中で怒りのスイッチが入った時それを抑えることのできる人はほとんどいないかもしれません。そんな時は子どもに怒りの感情を持つことは、人間として当たり前のこととしてとらえてよいのだと思います。親としてやってはいけないことをしてしまったとして自分を悪人だと思う必要はありません。

この子を好きになれないから、嫌いだからなどと思い込まないで下さい。愛情は好きとか嫌いとかという感情ではありません。愛情があるということは大切にしなければいけない存在であるという確固とした自分自身の意思なのです。嫌いだという思いがあっても愛しているのです。ですから感情的に叱ってしまったとき心が痛むのです。自分はダメな親だと思ってしまうのです。愛情が深ければ深いほどその悩みも深くなってしまいます。感情を子どもにそのままぶつけてしまい、子どもの心を傷つけてしまうことはできれば避けたいことですが、そうしてしまったとき、そのことを後悔したなら確認してほしいことがあります。「大切な命だから愛しているから叱ってしまったのだ。」と自分に言い聞かせてください。

私の祖父は私をげんこつで殴りました。殴られるとこぶが出たこともあります。祖父は叱ることに自信を持っていました。私は叱られる正当な理由があるから叱られることに覚悟していました。こわい祖父でしたが私は深く愛されているという確信を持っていました。祖父の近くにいる時は緊張し、静かにしていなければなりませんでした。なにか安心感がありました。祖父が怒り出すと近くにいる人は皆緊張していることが幼い私も感じ取ることができました。私は祖父を心から尊敬していました。祖父から叱られたことは心のトラウマにはなっていません。逆に叱られたことによって祖父の愛情を思い出すことができるのです。

叱ることが大切であるという話ではありませんが、深い愛情の中で育った子どもは自分が悪いことをしてしまったとき、それをいけないこととして理解できるのです。これは叱られるという覚悟を持つことができます。ですから自分が悪い時は、それを素直に受け入れることができます。

親であっても、何かあって自分の怒りの感情が抑えられなくなった時、子どもに手を上げる前に、子どもを激しく罵倒する前に、大切な存在として生まれてきた命が自分の目の前にいることを思い出してください。叱るべき理由がないときはその叱りを静かに心の中から消去して欲しいと思います。そして自分を愛している誰かがいることを思い出してください。その自分を愛してくれているのが、今自分が怒りの感情をぶつけようとしているわが子なのです。自分の心の弱さを、怒りを鎮める心の強さに変えることができますようにお祈りしています。



《ミロスコーン》(10個分)

小麦粉 200g、ミロ(粉末)20g、
ベーキングパウダー

12g(大さじ1)

砂糖 30g、バター100g、
豆乳 100cc

《作り方》

- ① バターは1cm角に切る。材料は全てボウルに入れてよく混ぜ合わせる。
- ② オーブンの温度は180℃にあたためる。
- ③ ①の生地を10等分にして丸めてオーブンで10～15分位焼いて出来上がりです。

